

脱ストロー牛乳 普及進む 給食用 23年度から 15都府県に

日本製紙は28日、飲み口が開けやすくストローなしで飲める学校給食用牛乳パック「スクールポップ」の全国採用数が、新年度の4月から75%増えると発表した。2022年度は13都府県で採用され、小中学校や特別支援学校に年間で計2億本分を提供しているが、23年度は新たに神奈川県と大阪府の一部地域が導入。15都府県で計3億5千万本分になる。15都府県に本県は含まれていない。

スクールポップは20年に製品を発表し、21年に高知県で初めて採用された。身近な容器の脱プラスチックを通じて環境保護の大切さを学習でき、教育効果が高いとして普及が加速。23年度は雪印メグミルクなどの大規模な乳業メーカーが加わり、既に採用されている千葉県や東京都でも供給エリアが拡大する。

一般に流通する牛乳パックは上部の屋根状部分を開くのに力が必要で、特に小学校低学年では開封が難しい。スクールポップは屋根状部分の一部に折り目を付けるなど構造を見直し、簡単に開くようにした。

日本製紙によると全国の給食用牛乳は年間約14億本。このうち計3億5千万本に備え付けのストローがなくなると、175トンのプラスチックを削減できる計算となる。

(令和5年3月29日(水) 秋田魁新聞より抜粋)

**4月3日(月) 北斗星よい**

学校給食用牛乳の紙パックからストローが消えつつあるようだ。環境保護の観点からの脱使い捨てプラスチックは外食、コンビニなどの取り組みが先行する。給食に取り入れられれば、環境教育への効果は大きい。

飲み口が開けやすく、ストローなしで飲めるパックが開発されたことによる変化だ。本年度は15都府県で使用されるという。本県の給食にこのパックが並ぶ日もそう遠くないかもしれない。

1960年代半ばに通った幼稚園で飲んだ牛乳は瓶入り。牛乳瓶は木箱に詰めて教室に運ばれ、冬は温めて提供された。牛乳瓶は回収して再利用でき、環境に優しい容器でもあった。

初めて目にした紙容器は69年、秋田市で開かれた秋田農業大博覧会の会場で配られた中身の入っていない三角パックだ。程なく毎日の給食にそのパック牛乳が並ぶようになった。三角が現在の四角い紙パックになるのはもう少し後のこと。三角パック時代からのストローがなくなるのは大きな変化だ。

牛乳を巡っては環境問題のみならず、全国的な酪農の危機にも目を向けなくてはならない。生乳需要の減少やウクライナ危機による飼料高騰で経営環境が厳しい。酪農家の離農に歯止めをかけなくては

牛乳パックの話題に続き先月31日、湯沢市皆瀬の乳製品製造業「栗駒フーズ」が事業停止した記事が本紙に掲載された。他にはない温泉熱の利用で瓶入り牛乳やヨーグルトなどを製造してきた。先進的な地熱活用を存続できないものか。(2023. 4. 3)